

サムエル記下 10 章 1～19 節

2025 年 9 月 3 日(水)

はじめに

本日のサムエル記下 10 章 1～19 節は、ダビデがアンモン人とアラム人の同盟軍と戦い勝利した記事です。その結果、ダビデの王国はアラム人を支配するに至ります。しかしアンモン軍との戦いは継続となり、11 章～12 章へと続きます。ダビデが犯した「不倫殺人事件」の背景にアンモンの首都ラバ包囲戦があるわけです。ですからこの 10 章は二つのテーマがあることになります。一つはアラムとの戦いの結果、ダビデの王国の北部方面が安定したこと、もう一つは、11 章～12 章への序文の役目です。

I サムエル記下 10 章 1～19 節の話の流れ。

さてサムエル記下 10 章 1～19 節の話の流れは、大きく三部構成になっています。第一部は 1～5 節で、アンモン人とアラムの同盟軍との戦いの発端について書いてあります。アンモン人がダビデの弔問の使節を侮辱したことが戦いの原因なのです。第二部は 6～14 節までで、ダビデがアンモンとアラムの同盟軍と戦った記事です。その結果、アラム軍は敗走し、アンモン軍は首都のラバに退却、籠城します。第三部は 15～19 節です。ここはダビデがアラム軍と戦い勝利したという記事です。その結果、アラムの盟主ツォバのハダトエゼルに隷属していたアラム系の諸王たちは、イスラエルに隷属するようになり、ダビデの王国の北部は平定されたわけです。以上のことを箇条書きで記すと、次のようになります。

第 1 部 1～5 節. アンモン人、ダビデ王の使者を侮辱する

- 1 節 アンモン人の王ナハシュの死去と後継者ハヌンの即位
- 2 節前半、ダビデ、哀悼の意を表す。
- 2 節後半～4 節、アンモン人の王ハヌン、ダビデの使節を侮辱する。
- 5 節 ダビデ、侮辱を受けた使節を保護。

第 2 部 6～14 節、ダビデ、アンモン人とアラム人の同盟軍と戦い、勝利する。

6～8 節、アンモン人、アラム人との同盟軍を組織し、戦いにそなえる。

(1) アンモン人、アラム人の傭兵を求める

- ①ベト・レホムとツォバのアラム人歩兵 2 万
- ②マアカの王、兵 1 千名
- ③トブの王、1 万 2000 名。

(2) ダビデ、ヨアブをはじめ勇士たちの全軍を派遣**(3) アンモン人、城門の入口付近に軍を配置**

ツォバ、レホブ、トブ、マアカの軍は、周辺の野に配置

9～11 節、ヨアブ、戦列を再編成する。

前方のアラム軍に対して：ヨアブが指揮する兵团

後方のアンモン軍に対して：アビシャイが指揮する兵团

13～14 節 ダビデ、アラム軍とアンモン軍の同盟軍と戦う。

- (1) アラム軍、敗走。
- (2) アンモン軍が町の中に退却、ヨアブ、エルサレムに戻る

第 3 部 15～19 節、ダビデ、アラム軍に対して勝利する。

- (1) アラム軍、ユーフラテス方面のアラムに援軍を要請。
- (2) アラム人の援軍、ハダトエゼルの軍の司令官ショバクが率い、ヘラムに到着
- (3) ダビデ、イスラエルの全軍を出陣、ヨルダン川を越えてヘラムに向かう。
- (4) ダビデ、アラム軍と戦い、勝利する。
 - ①アラムの戦車兵 700、騎兵 4 万、司令官ショバクを倒す。
 - ②アラムの諸王、イスラエルと和を結び、イスラエルに隷属
 - ③アラム人、アンモン人を支援しなくなる。

以上の戦いを下の地図で確認しましょう。赤はアラム軍。青はイスラエル軍



Ⅱ. サムエル記下 10 章 1～19 節の解説

【1 節】

アンモン人は、創世記 19 章 36～38 節によれば、アブラハムの甥ロトの子アンモンの子孫です。ですからアンモン人はアブラハムの子孫であるイスラエルと無関係ではありません。アブラハム系の民として共存できる可能性がありました。アンモンはモアブの北の領域に定着し、ラバ＝ラバト・ベネ・アンモンが首都でした。そこは南エイラトから北のダマスコに至る「王の道」という主要街道の途中にあり、交易の拠点都市として栄えました。

アンモン人の王ナハシュは、サウル王によって打ち負かされました（I サム 11）。その後、サウル王後継者ダビデとは、比較的良好な関係であったものと思われます。しかしナハシュが死去し、後継者としてハヌンが王となると、イスラエルとの関係は変化したわけです。こうしたことは、次の記事から分かります。

ダビデは、ナハシュの死去を聞き、弔問の使節を派遣することにします。それは、「ハヌンの父ナハシュがわたしに忠実であったのだから、わたしもその子ハヌンに忠実であるべきだ」と思っていることです。普通は「父ナハシュがダビデに忠実であったから、その息子のハヌンもダビデに忠実であれ」となりそうです。しかしダビデは、そういいません。父ナハシュがダビデに忠実であったので、今度はダビデがハヌンに忠実であると告げたのです。またこの「忠実」は「ヘセド」です。前の 9 章では「忠実＝ヘセド」によってヨナタンの遺児イシュボシェトを保護下におきました。ですからダビデは、ナハシュの遺児ハヌンに対しても「忠実＝ヘセド」によって良好な関係を結ぼうとしたわけです。そのためダビデは、いわゆる弔問外交を行ったわけです。

しかしハヌンの家臣団は、ダビデの弔問の使節を信用せず、侮辱します。ダビデが提示した「忠実＝ヘセドを軸とした互惠関係」は思いもよらないことだったからでしょう。家臣団に馴染みの考えは「支配－被支配」の関係だからです。そこで、彼らの考えは次のとおりです。

- ①ダビデがナハシュに敬意を表して弔問の使節を送ったと考えてはならない。
- ②ダビデは、弔問の使節をスパイとして使い、この町の様子を伺いに來たのである。すなわちアンモンの人口、食糧、兵力、城壁の構造や強度などを探るつもりである。
- ③それは、ダビデがわれわれを倒すためである。

何故、家臣団がこのように考えたのかは不明です。おそらく彼らは、先王ナハシュとダビデの関係をよく知らなかったか、理解できなかったのでしょう。むしろ彼らにとっては、サウルとの戦いに敗北した傷跡＝屈辱であり、それを晴らすことが重要だったのでしょう。つまり国益ではなく、私怨です。これが、戦争という不幸な事態を招くのです。

そこでハヌンと家臣団は、ダビデの弔問の使節に次のような侮辱を加えたわけです。

- ①ダビデの使節を逮捕して、ハヌンと面会をさせない。
- ②彼らのひげを半分そり落とす。
- ③彼らの腰から下の服を切り落とす＝奴隷の姿にする。
- ④そのような姿のままでダビデに送り返す。

一国の使節にこのような侮辱を加えるなら、当然、国際問題になります。つまりダビデの王国との戦になる可能性は大きいわけです。家臣団は、自分たちの加えた侮辱がこのような結果を産むことをなぜ考えなかったのか、あるいは、自分たちの力を過信していたのかもしれませんが。いずれにせよ、私怨で目が曇っていたのではないのでしょうか。

ダビデは、ハヌンによる弔問使節に対する侮辱を聞くと、彼らが恥をかかないように、ひげがそろそろまで、エリコに留まるようにと命じていました。世俗の王の場合、侮辱に対する抗議とし

て、使節団を殺害することもあり得ます。しかしダビデはそのようなことをしなかったのです。世俗の王ではなく、神の民イスラエルの王だからです。

【6～14 節】

聖書テキストは、ダビデが侮辱に対してどれほど怒ったのかを語っていません。その代わり、「アンモン人は、ダビデの憎しみをかったと悟ると」とあります。アンモン人がダビデの怒りの程度を勝手に推測しているわけです。したがって、例えば、アンモン人の王ハヌンが家臣団を処罰し、謝罪するといった道は最初から考えていません。つまりは、アンモン人は、機会をとらえて、ダビデの支配に反旗を翻そうとしていたわけです。そこでアンモン人は、ダビデとの戦いに備えて、アラム人を傭兵として動員するわけです。それは次のとおりでした。

①ベト・レホブとツォバ：歩兵 2 万。

②マアカ：兵 1000。

③トブ：兵 1 万 2000。

これらのアラム人は、先にダビデとの戦いにおいて敗北していたので(Ⅱサム 8:3～8)、アンモン人の王ハヌンの要請に直ぐに応じたものと思われます。こうしてアンモンとアラムの同盟軍がダビデと戦うことになったわけです。他方、ダビデ王は、ヨアブをはじめ勇士たちの全軍を派遣しています。ここで対照的なのは、アンモンはアラムの傭兵を使っているのに対し、ダビデは「勇士」を派遣していることです。傭兵は給料で雇われた兵のことです。ですから命をかけて戦うというよりも、給料に見合う分だけで戦う者たちです。

さてアンモンとアラムの同盟軍は、ダビデ軍を挟撃する作戦だったようです。ダビデ軍が東にあるアンモンの首都アラバに進軍すると、アラム軍は北から南下して、ダビデ軍の横腹を攻撃するか、背後に回って攻撃することを考えたようです。それに応じて、ヨアブは戦列を再編成しました。柔軟な対応が出来たのです。ヨアブはアンモンの首都ラバに向かって進軍する一方、ヨアブの弟アビシャイは南下してくるアラム軍に向かって進軍ことにしたわけです。いわば二方面作戦です。しかもその際、ヨアブは、アビシャイに向かって助け合うことを命じています。ヨアブが不利ならアビシャイが助け、アビシャイが不利ならヨアブが助ける、そういう連携を大切にしました。

しかし実際に合戦が始まると、アラム軍は敗走しました。またそれを見たアンモン軍も敗走し、ラバの町の中に退却してしまったのです。そのためヨアブは、アンモンをアビシャイに任せ、一旦エルサレムに戻ったわけです。この戦いの続きは、11 章～12 章で語られます。

【15～19 節】

ところでアラム軍は、イスラエルに打ち負かされたと知ると、体制を整えて、再び、イスラエルと戦うことにしたようです。「**団結し**」とあるように、今度は傭兵ではなく正規軍のメンバーとして戦いに臨むのです。そのためアラムのリーダーであるハダトエゼルは、さらに援軍を動員したわけです。それはユーフラテス方面にいるアラム人で、軍の司令官はショバクでした。このように本格的な戦いになるため、ダビデはイスラエルの全軍を召集し、戦ったわけです。ダビデは、このアラム軍との戦いに勝利し、アラムの戦車 700、騎兵 4 万、そして軍の司令官ショバクを倒したわけです。こうしてアラムの諸王は、イスラエルに敗北したことを認め、和平を講じ、ハダトエゼルへの隷属からイスラエルへの隷属に変わります。これ以降、アラムはアンモンと協力してイスラエルに戦いを挑むことはなくなります。以上のように、アンモンの家臣団の私怨から始まったこの戦争では、かえって、ダビデの王国の北部方面の支配を強化することになったのです。